コロナ禍の新日美特集【第３報】

会報
174号
新日本美術協会

事務局
千葉県柏市大津ヶ丘
3-17-17-401
森屋治三方
TEL04-7191-6760

編集委員
石原　修
早田美智子
篠　光定
湯澤朱美

原稿常時募集
次号令和３年８月予定

大切な気付き

委員　土屋　政夫（WEB担当）

土屋　政夫

コロナ禍で気付かされた事柄が様々ありますが、これまで営んできた日常の行為の中には不要不急など無いという事です。

寝る所があり、食べられ、洋服を着て歩ける。それなのに満たされない訳は、ご近所の方との立ち話や友人と気軽にお茶飲みが出来ないからです。

リモートで孫と話せてもネットで展覧会を開けても空疎感が拭えません。鑑賞者の反応を感じながら作品の肌ざわりを見て、仲間の語り口の温もりを含めその現実の場を共有出来たありがたさに気付かされました。

私は「パンのみにて生きるにあらず」「飢えた者に文学は必要か」この二つのテーゼを行き来する視座で物事を捉えます。映画や演劇、音楽会、美術展などはお腹の足しにはなりませんが、飢えを凌ぐパンだけでは生きている実感が伴いません。人との繋がりで初めて自分を認識できます。

人との交流から個々の感性や情緒がぶつかり混ざりあうことで多様な文化が生れ、共通の関心事を持つ者が集うだけでも視野が広がります。この融合が各人のセンスや品格となり目に見えない所で行動の最終的な選択をします。感性は重要な根幹を担っています。

先の見通しが立ないこの時代に於いて、今、大切だと思う事をしっかり守ることが将来の展望になると考えます。その一つとして眼前にある新日美展に傾注すること。私はこれを立ち位置として生きていくよすがにしようと思います。

コロナ禍の日常

委員　相楽　富美子

会員の皆様お元気でお過ごしでしょうか。今迄経験しなかった気を遣う毎日になり、神経が疲れきってしまいました。

その様な折り、美術年鑑社の「漢字一文字五百曼陀羅」の企画を知り、仏教曼陀羅図を模した物かと思い参加いたしました。

今の世の中、自分がどのような気持ちでいるか一文字で表し、その思い付いた字の訳を書くと言うものでした。

自分では多分同じ様な文字を考えるのではないかと思っていましたが、五一〇数名の日本画家、洋画家、書家、陶芸家、その他参加があり、全部と言っても良い程同じ字を書く人が無く、大変驚くと共に、同時に字を並べるだけで書いた人の内面がわかる様な気がして、おもしろい企画でした。

私もその為に、久しぶりに毛筆を使って字を書き、出来る迄何かと心が楽しい日を過ごせ、おもしろい企画でした。

昨年は本展が始まって初めての中止となりましたが、コロナには勝てません。今は少しでも良い状態になり展示出来ないかと自粛の中、昨年描いた八〇号の作品を眺めたり、本を読んだり、短歌をかじって見たり、出歩けない月日が早く過ぎ去る様願っています。

「漢字一文字五百曼陀羅」の一例

相楽富美子［知］

相楽富美子　さがら・ふみこ　洋画家　109
一生には自分ではどうしようも無く過ごさなければいけない月日が有る事を思い知らされた。